（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　青田麻未

芸術批評の基礎づけから理論的抽象化を遂げた英米分析美学の系譜にあって、環境美学は社会的実践（環境保護運動）と結びついている点で独特である。にもかかわらず芸術哲学の枠組みを惰性的に引き継いだままに見える環境美学の現状の合理性を問うこと、それが本論文の問題意識を形成している。環境美学の始祖アレン・カールソンが「環境批評」の本質として科学的知識を重んじたことから、認知モデル／非認知モデルの二分法に沿った論争が環境美学を牽引してきたが、本論文ではその二分法図式を発展的に解体し、「環境に対する美的判断の客観性の根拠を問うべきか否か」「批評対象を画定するフレームを対象の内に求めるか外に求めるか」という二つの軸に置き換える。議論の土俵を敷き直すこの戦略はよく練られており、環境美学特有の諸前提を鮮明に浮かび上がらせ、論争史を辿りやすくしている。

本論文の第一の学術的貢献（第１部）は、カールソン以降の諸説の前提に異を唱えながらも各々の具体的含意を精査し、諸説間の因果関係・論理関係を調べ、思想史的な概観整理を行なったことである。そのうえで第二の貢献（第２部）として、本論文固有のモデルが打ち出された。「美的判断の客観性」に沿った第一軸についてはＥ．ブレイディの想像力モデルおよび知覚的証明、「フレーム」に沿った第二軸についてはＡ．バーリアントのフレーム外在主義がそれぞれ選ばれ、その二つを洗練しながら組み合わせることで、独自の視点が提示された。

第１部における思想史的整理は、現行諸説をすべてカールソンとの比較のテンプレートに沿って論じるという、いささか平板な記述に陥ったきらいがないではない。しかし、環境美学の論争が、カールソンへの批判を中心にして動いてきたという実情に照らせば、諸説体系化として本論文の方式は必然だったと言える。のみならず、第２部の理論構築が、既成諸説のいずれかを擁護し改善するといった通例の道をとらず、複数の評価軸ごとに別個の説を採用し融合するという野心的な企画であったことをふまえると、単一のテーマセッターを座標原点に据える本論文の方法は、思想史的制約からの発展的離脱を図るうえで的確であったと認められる。またもうひとつ、本論文のカールソン解釈そのものに便宜的な単純化が過ぎるように疑われるふしもあったが、これも同じく諸説の相対的関係を描き出すという狙いに鑑みて、本論文の論証構造を損なう欠陥とは言えず、多少の注釈により修正が可能である。

最終章は、第１部で検討した諸説と並ぶ理論を新たに提示しつつ、「居住者」「観光者」という二つの感受性グループの美的判断を論じるに至った。「環境批評家」という抽象概念に具体的なフレームを与え、環境美学の深化と拡張に明確な道筋を示しうる構想の序説として高く評価できる。以上のことから、審査会委員全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に値すると判定された。